

2021 新春インタビュー 10 吉玉典生 延岡商工会議所会頭

19 昨年(2020年)は新型コロナウイルスに翻弄された一年でした。

国内初の感染者が確認されて以降、3月にはタレントの志村けんさんが亡くなるなど、私たちにとつても身近な脅威になりました。世界では既に200万人が亡くなっています。第1次世界大戦の850万人、第2次世界大戦の912万人という犠牲者数を考えると、まさに戦争に匹敵する惨禍です。

一方で各国が同じ苦境の下、対応の違いで現状が洗



しました。現実を突き付けられ、ようやくデジタル庁を創設して遅れを取り戻す動きにつながったと思います。

い出された側面もあります。世界では20年来の課題だったデジタル化が一気に進み、それは日本が世界第2位の経済大国だった30年前に比べて、特にICT(情報通信技術)の分野でいかに遅れていたのかを明白に

——地元への影響は。 会員企業のみならず中小企業や小規模事業者の景況感足元から大きく揺らいでいます。売り上げの激減、休業や事業の縮小といった影響が顕著で、消費活動も力強さに欠けています。イ

ンバンドをはじめとした観光や飲食業、それらに関連する業界がますます大きなダメージを受けました。これらの雇用の確保、事業の存続を図るために、国や県、そして市からはさまざまな助成策が施行され、会議所としても中小・小規模事業者の状況に応じた施策を提案し、助成措置を受けられるよう当初から取り組んでいるところです。

には小規模事業者への家賃補助とテイクアウト可能な飲食店紹介の取り組み強化などの8項目、6月にはプレミアム商品券の発行といった施策拡充など5項目を市に要望しました。一定のご理解はいただいたと考えていますが、行政主導だけではなく、各業界からの声も聞きながら、切れ目ない施策立案を望んでいます。

——見通しと抱負を聞かせてください。 県の「緊急事態宣言」の下、外出自粛や飲食店の営業時間短縮などが求められています。改めて厳しい状況に直面していますが、県民一丸となって「新しい生活様式」を守る必要を強く感じています。私たちは国内外の情勢が刻々と変化の中で、足元を見据えて、あらゆる状況に耐えうる企業に成長していかねばなりません。経営者が将来に希望を持ち、コロナ後の変化を捉える。「今やるべきことは何か」といった課題やデジタル化への取り組みなどをしっかりと見据えて、地域経済に貢献する必要があります。課題は少なくありませんが、本年も「中小企業や小規模事業者の活性化」「地域の発展」を着実に進められるよう努めたい。地方創生や人口減克服という課題解決に向けて創意工夫を重ねて来ましたが、任せて良かった延岡」を目指して一つ一つ取り組んでまいります。

地域の発展を着実に

課題解決へ創意工夫重ねる

厚生労働省が7日、コロナ禍関連による解雇や雇止めの見込みが全国で8万1211人上ったと発表しました。当初は宿泊業やタクシーなど道路旅客運送業が中心でしたが、昨夏以降は製造業や飲食業での増加が目立っており、非常に懸念しています。

——さまざまな手を尽くされたと思います。 昨年3月には融資利率の全額補助なご5項目、4月

会議所としても休日の相談会や窓口相談を実施し、小規模事業者に寄り添いながら経営上の不安や支援策に対応してきました。新規創業者への支援として、金融機関と連携して行った各種セミナーには参加者も多く、創業の芽も感じました。コロナ後は産業界を取り巻く様子が大きく変化するはず。そういった新しい姿に対応出来る新規事業が出てくることを期待しています。

TOWN

カラフルな「海の宝石」ダイバーに人気

ウチフリツンザヤウミウシ



海中にも 干支の主演 ウミウシたち

1/19

①

今年の干支(えご)は丑(うし)。海中にいるウミウシは、触角を牛の角に見立てたことが名前の由来とされる。英語で「海のナメクシ」。見た目はそっくりだが、大きく違うのはその色。カラフルな姿は「海の宝石」と呼ばれるほどだ。延岡マリンスービス(延岡市川島町)提供の写真で近海にすむウミウシの仲間を紹介しよう。

代表の高橋勝幸さん(49)によると、ウミウシの仲間は国内に200種類以上いるといわれる。黒潮の影響を受ける延岡の海は、魚類と同じように伊豆や沖縄でも見られる種類が混ざる格好の観察ポイント。タイバーが写真に収めたウミウシは約180種類に上るといふ。

生息域は種類によっ

て異なる。レジャータイバーが潜る範囲では、水深0.5〜40メートルまでの海産類やが付いた岩礁が多く見られる。

バスルカウヤグリアンションなどさまざまな体色模様が見られる。研究の歴史が浅く、いまだに新種が発見される神秘性もタイバーを引き付ける。加えて、スロモーションのまじにゆっくり動くため、写真に撮りやすいのも人気の理由だといふ。

体長は大きなもので30センチになるが、好まれるのは小さくてカラフルな種類。例えば、赤、青、オレンジ、黒色の絵の具で塗り分けたような体に、朱色の触角を持つ「ゼトリアウウウウミウシ」はまるで虹のよう美しい。

「カチユウ」の愛称で呼ばれるのは「ウチフリツンザヤウミウシ」。明をいだいた色の体と木の突起。人気キャラクターにそっくりなことから世界中でこの名が通用するといふ。

市街地に近い延岡の海は、マンボウ、カエルマンノウなどの人気魚や色とりどりのサンゴで知られる。海藻類が増え始める月中旬から7月末にかけてはウミウシの仲間も加わり、さまざまな「海中生物の楽園」になる。

高橋代表は「リアス式海岸で山と海が近く、山の栄養分が川が海に注ぎ込み、黒潮と共に豊かな環境をへんり出している。サンゴも元気がいい。魚群に囲まれることも多い。魚の量は伊豆や沖縄の海に負けない」と、あるさこの海の魅力をアピールしている。

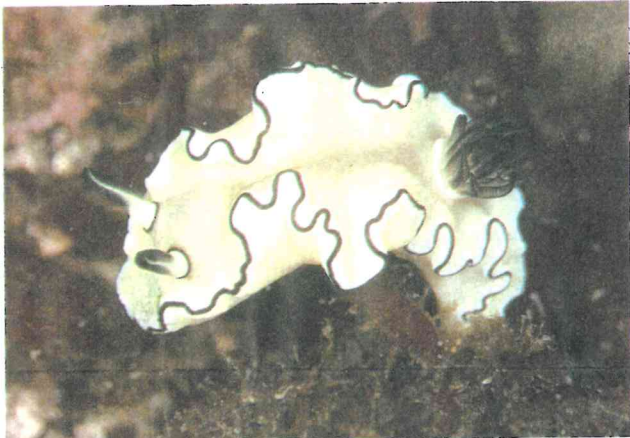


ゼトリアウウウミウシ

カチユウ



ウチフリツンザヤウミウシ



カチユウ